



北海道弁で関西弁のコンテクストを語れるか？

岩崎真紀一文
text: Maki Iwasaki

劇曲『人の気も知らないで』は、大阪を拠点とする演劇ユニット iaku の主宰で劇作家・演出家である横山拓也の作品。同僚の結婚式の打ち合わせのために集まった三人の女性の会話がやがて白熱し、「立ち位置の違い」「それぞれが抱えているもの」が見えてくる、という作品だ。職場での「人間関係あるある」が巧みに織り込まれている点も心憎い、2013年にせんだい短編戯曲賞を受賞した名作である。2014年には iaku の全国ツアーで上演され、私も札幌公演で、疾走感のある関西弁での応酬を楽しんだ。

この作品、今年4月に演劇制作カンパニーラポチのプロデュースにより、札幌の女優を起用しての北海道バージョンが上演された。演出は変わらず横山拓也である。

上演にあたり、横山はオール関西弁のセリフを「北海道の女優にとって自然な言葉」に書き換えた。が、札幌で使われている言葉はそれほど個性が強くない、というのは誤算だったのではないか。この公演、十分に面白かったものの、関西弁バージョンを観た私には「北海道なりの生き生きとした会話」には今ひとつ足りないように感じられたのだ。北海道ネイティブではない演出家が、「日本各地から寄り集って

150年ほどで変化してきた、標準語とは似て非なる言葉」での会話・議論の呼吸感を量りきれなかった、ということがあるかもしれない。

一方、関西にルーツを持つ友人達からは「テンポが遅い。もっと喰い気味なはず!」「自虐が笑いになるのは関西ならでは」という感想があった。それで気が付いたのだが、女優陣のほうが関西のコンテクストで書かれたものを体内で北海道化するのに苦戦した、という可能性もある。末席ながら文章を書く私には「内容と想定ターゲットによって文体が決まる」「文体を指定されると内容が枠にはまる」という感覚がある。関西弁で書かれた戯曲には関西固有の会話文化(?)があり、北海道ナチュラル化するには意識に近い翻訳が必要なのかもしれない。例えば、ノリ突っ込みのシーンなどに。

ご当地言葉での演劇というと、札幌で知られたものには青森県の作・演出家である長谷川孝治の作品があるが、彼の戯曲は標準語で書かれているのだという。それを俳優たちももっとも自然な形で発声した結果が、東北弁の響きも味わい深いあの舞台なのだそうだ。

『人の気も〜』の北海道バージョンは、北海道ネイティブに通じた女優にもっとニュアンスをゆだねるべきだったのかもしれない。あるいは、もっと個性の強い地域の言葉への変換だったら、また違っただろうか。それとも、関西弁のコンテクストは他の地の言葉には馴染まないのか。それを知るために、東北弁や博多弁などでの上演を観てみたい気がしている。



2015年4月25日・26日に上演された、シアターZOO 提携公演【Re:Z】ラポチプロデュース『人の気も知らないで』のワンシーン。出演は、達者な演技に定評のある小島達子(ELEVEN NINES)、心を投げ出すような独特の語りで演じた田中佐保子(intro)、若手ホープの柴田知佳(劇団アトリエ) 撮影/高橋克己